歴史散歩

れきしさんぽ No.8

大善寺の石造美術を訪ねて（１）

久留米地方の石造物には、古代より神社関係と庶民信仰に関するものが特徴としてあります。鳥居・狛犬（こまいぬ）・石地蔵などがそれです。この地方に「石の文化」と呼ばれる種々の石造物が展開したのは、浮羽の山北、八女の長野の石工の活躍に負うところが極めて大きく、幾多の「石の遺産」が今日なお散見されます。

市内に残る石造物の中から、今回は大善寺周辺にスポットをあて、石造文化財を中心に探訪し、あわせて社寺等の沿革や他の文化財を紹介したいと思います。

大善寺の板碑⑮

１．大善寺（大善寺町宮本）

天台宗比叡山派で、山号を御船山（みふねざん）と号し、本尊は阿弥陀如来です。弘仁年間に建立されたと言われ、寺号が明治4年（1871）に廃止され、同14年に県社玉垂神社となりました。

門徒は塚崎の妙覚院に移されましたが、その後の寺院復興運動により大正15年（1926）、現在地に復興しました。境内には3基の古い板碑（いたび）があります。

① 寛永11年（1634）銘　碑高1.30m　月輪内に阿閦の種子と迎道海禅門の碑銘。
② 明暦2年（1656）銘　碑高0.95m　月輪内に弥陀の種子。
③ 万治2年（1659）銘　碑高0.72m　「奉納一石一字妙法」の刻出。月輪内に胎蔵界大日の種子。

２．大善寺玉垂宮（大善寺町宮本）

672年（白鳳1）の建立と言われ、玉垂命・八幡大神・住吉大神が祭られています。初めは高法寺と称していましたが、嵯峨天皇の814年（弘仁5）三池郡司が勅命で、殿堂・楼門・廻廊などを造営、後に御船山大善寺と改称しました。

神仏混交の典型的な神社で弘仁5年には、衆徒四十五坊、社領三千町にも及び室町時代まで栄えました。16世紀末小早川秀包から社領を没収されますが、その後、田中吉政・有馬豊氏らの寄進を受けるなど、変移がめまぐるしく、明治初年の神仏分離令によって寺は廃され社のみ残り、明治14年に県社指定を受けました。境内には石鳥居と神社前のアラレ川に架かっていた傘橋の記念塔などの石造物が見られます。

（１）傘橋（かさはし）（唐傘橋）

大善寺玉垂宮の門前町筋から神殿に向かって一直線上に架けられていた、祭典専用の神橋は傘橋（唐傘橋）と呼ばれていました。

この橋は宝暦11年（1761）、久留米藩の寄進で建立されました。しかし、川はすぐに氾濫（はんらん）して橋が流出してしまうので、天明元年（1781）水圧の少ない1本足にして中程から傘のように細い数本の支えを付けた構造で再建されました。長さ11間（約20m）、幅8尺5寸（約2.5m）であったと記録にあります。そして、

その姿が唐傘に似ていることから、傘橋と呼ばれるようになりました。その際、礎石となる大石がなくて困っていたところ、善政で有名であった筑後国司道君首名の碑石が大きいと告げる人があり、これを柱礎に使ったと伝えられています。寛永3年(1850)、この橋が洪水で流落しました。新たに架け替えられた時、使われていた石柱が記念塔として玉垂宮境内に建立され、現在も残っています。

日本最初の実測にもとづく日本全図「大日本沿海輿地全図」を作成した伊能忠敬は、文化9年(1812)久留米城下から柳川街道を測量しながら南下し、大善寺村高良玉垂神社周辺の記事として、「宮本川神幸橋　渡巾一十六間(約30m)石柱にて一本橋杭　又傘橋共伝」と測量日記に記しています。

①由来碑(明治三十年三月の銘)

②記念塔「奉寄進石柱　天明元辛丑年十一月吉祥日」の銘

傘橋由来碑①

傘橋記念塔②

(2) 石鳥居三基

一般に鳥居は神社の門であるといわれますが、起源については、日本始源説とインド・中国・朝鮮渡来説とがあって定説がありません。鳥居の語源も「鶏が止まり居る横木」、「人が通り入る門」説があり、定かではありません。

① 元和鳥居

玉垂宮表参道に立つ台輪鳥居で、柱上についている台輪は柱と別石構造です。柱・貫・笠木・島木とも三本継ぎで肥前型に似ています。鳥居の最上部の横木の名称である笠木は、曲線を描き両端で反りをみせ、反増となっているもので、様式的には明神系です。石材の風化程度から笠木は後世の改造、また貫もその可能性が考えられます。

向かって右柱に「国主田中筑後守　朝臣忠政」、左柱に「筑後国三潴郡下荒木村願主田河七郎左衛門尉」と「元和三李仲春日」(1618)の造立年銘が見られます。筑後地方では特に古い鳥居のひとつです。

表参道の元和鳥居③

② 肥前鳥居

玉垂宮裏口に立つ鳥居です。もとは元和鳥居が一の鳥居で町内に立ち、この鳥居は門前にありましたが、昭和9年に現在の大鳥居が新設された際、元和鳥居を門前に移し、この鳥居を裏口にまわしたものと言われています。笠木・柱ともに三本継ぎで貫は後世に補修されています。

裏口に立つ肥前鳥居④

笠木は先端で僅かに反り、島木との間に高彫りの節目を施して両者を区別しています。笠木の反りや柱の転びが少なく、肥前型でも衰退期の姿をよく表しています。笠木の下側に柄穴があるので当初は額束が組み込まれていた可能性があります。

柱には長文の造立趣旨銘が刻まれています。向かって右柱に「当国領君有馬源朝臣頼徳武運長久御子孫繁栄」、左柱には「明和八歳辛卯八月」(1771)の銘が見えます。なお、左柱根元近くには「石匠山北村秦宗右衛門朋芳」銘があり、山北石工の作品であることが分かります。

社頭の大鳥居⑤

③ 大鳥居

昭和9年3月建立の大鳥居で、もと大善寺町中に柳川県道をまたいで立っていたものを昭和46年に社頭に移築したものです。花崗岩の石材を使用した典型的な明神鳥居です。笠木・島木は一体化して一石構成で、笠木の反りも雄大です。柱も貫も一石造りの巨石を用い、高さ10m、柱径1m、柱間6mに及び、規模の大きさと壮麗さにおいて当地方最大の鳥居です。原石は徳島から運ばれました。石工には「津留崎与三次郎」があたっています。

(3) 石造狛犬

玉垂宮拝殿前に位置する一対の狛犬で、向かって右側がア形、左がウン形で、共に耳が垂れており角がありません。ア形は舌を僅かに出し、歯並の両端に牙が見られます。ウン形は下唇をかんで両端に長い牙があります。眉を寄せた眼光の鋭さ、細身の体ではあるが胸を張り出し、腰を引いて構える姿に力感があり、巻いて肩口にかかる頭毛等も両形に共通するものです。

拝殿前の石造り狛犬⑥

ア形は右前脚を一歩踏み出し、ウン形は右前脚で無文の小玉を押さえています。本体は作り付けの方形台座に載っています。石工は「山北村白石源七保介　同利七保素」とあり、「明和七庚寅歳仲冬吉祥日」(1770)の造立銘があります。石工の白石源七の作品は市内日吉町日吉神社の狛犬など各所に見られます。

久留米市内でも古い狛犬であり、山北型狛犬の祖形式を知る上で貴重な作品です。

(4) 青面金剛塔

玉垂宮の裏口の鳥居の西側にある板碑形式の文字塔で、高さ0.8m、幅0.9mほどあり、上部は三角形に突出しています。碑面中央に青面大金剛の文字、左右に「安永十丑歳」(1781)と「三月吉良日」の造立銘が刻まれています。裏面には「庚申講連中供養師□□□司法印善住院」の文字が刻まれ、庚申講を結んだ人々の供養塔であることがわかります。

庚申信仰は、人の体内にいる三尸の虫が60日目ごとにまわってくる庚申の夜、天に昇ってその人の罪悪を天帝に告げるため生命をちぢめられる、とする中国の道教の

社務所横の青面金剛塔⑦

教えに仏教的な信仰が加わって室町時代にはじまったと言われています。室町時代後半には阿弥陀を本尊とするものなどが造られますが、江戸時代には悪疫を退治する青面金剛が見られ、本塔もその一つです。

久留米では、京町日吉神社の石造青面金剛像とこの文字塔が著名です。

(5) 石灯籠

石燈籠の構成は、上部から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基壇からなり、火袋の平面プランによって、八角・六角・四角などの形式に分かれます。

拝殿前にある一対の石燈籠は、平面プランは四角形をなし、竿は円弧状に反り、裾で開いています。石材には角閃石凝灰岩を用い、石工名は隣接してある石造狛犬の作者である山北村の白石源七で、狛犬よりも古く宝暦12年(1762)の作品です。

他にも境内には同型のものがあり、石材も同様なことから、同じく白石源七の作と考えられます。

拝殿前の石燈籠⑧

(6) 神宮碑

境内御輿庫の東側に位置します。伊勢参宮同行者の記念に建てられたもので、伊勢講について知る資料の一つ。願主七名が連記されていますが、造立年銘が記されていません。

伊勢参りの路銀(講銭)を積立、クジによって代表者を順廻りに派遣し、出発の際は全講員によって宴をはり村境まで見送る。帰参の時も村境まで出迎えをし、宿で神札や土産が講員一同に贈られ、酒宴を催すというのが一般のやり方だったようです。近くの藤吉天満宮にも3基の古い神宮碑があります。

神宮碑⑨

大善寺玉垂宮境内の石造文化財位置図

1. 傘橋由来碑
2. 傘橋記念塔
3. 元和鳥居
4. 肥前鳥居
5. 大鳥居
6. 石造狛犬
7. 青面金剛塔
8. 石燈籠
9. 神宮碑
10. 芭蕉句碑
11. 石虎
12. サイの神さん
13. 下馬石

◆ 歴史散歩 No8 ◆

発行日 平成17年3月31日改訂
発 行 久留米市教育委員会
〒830−8520
福岡県久留米市城南町15−3
教育文化部文化財保護課 0942−30−9225
久留米市埋蔵文化財センター 0942−34−4995
久留米文化財収蔵館 0942−38−6194